

日本は一体どうなってしまったのだろうか。日本全体が狂ったとしか思えない異常事態が出来しているとしか思えない。常軌を逸した事件や事故ばかりである。母性を喪失した女性、いたいけな幼児や小さい女の子に異常な関心を示す育ちきらない男性、等々。社会面を見るのも嫌になり、その余りの多さにどれがどれだったのか解らなくなってしまう。

何故、斯かる異様な日本社会になってしまったのか。どうすれば、正す事が出来るのか、誰も処方箋を示さない。社会の木鐸であるべき政治家にそれを期待できそうにもない。教師や評論家も国民が納得する道標を示しえない。示したところで、誰がそんな連中の言うことなど信じるであろうか。

悲観的に過ぎるのであるか。

暗い話題は辞めよう。



さる 31 日、スーダン PKO「国連スーダン派遣団」創設をアナン国連事務総長が安保理に勧告して以来、国内でも自衛隊をスーダンまで派遣する流れが固まりつつあるようだ。

しかし、自衛隊をスーダンにまで派遣することには重大な疑義がある。

一般的には幾つかの問題点があろう。

その第一は、自衛隊の能力の問題であり、隊務に与える影響を如何に見るかということである。確かに、インドネシアの国際緊急援助隊、インド洋での給油活動、ゴラン高原の国連平和維持活動、イラクの復興人道支援活動等合計で二千数百名を派遣しており、その交代要員等を考慮すればある意味では手一杯かもしれない。国内の災害派遣や民生支援への影響も皆無ではないかもしれない。

聞けば、C-130 輸送機は 16 機あったとしてもその運用はそろそろ限界に来つつあるようだ。

しかし、私の立場は、巷間言われている上述の論に与するものではない。

第二の論点は、スーダン PKO は PKO 派遣 5 原則に抵触する恐れがあり、まして所謂本体としての活動即ち PKF には自衛隊はまだ対応できない。そのレベルには至っていないということである。5 原則は必要ならば、変更する事に躊躇すべきではない。また、本隊業務は、確かに未知の分野ではあるが、今の自衛隊であればある程度の訓練を受ければ対応できると、連隊長や師団長として部隊を統率した者としては言える。

問題は、上述の二つの論点ではなく、もっと根源的なものである。何故一スーダンなのかと云う事だ。日本がスーダンまでわざわざ出かけていく必要があるのか、極めて疑問である。国連安保理の拡大常任理事国入りを目指す日本としては、国連に協力し、国際問題に積極的に関与する姿勢をアピールする必要があるなどという論理は邪道である。スーダンの問題は確かに国連が関与して解決する課題かもしれない。フォーサイト誌などに書かれている状況などを読むと国際社会はもっと関心を持つべきかもしれない。そのことと

日本が関与すべきであるということとは違う。

日本としては国益との観点から該国に如何に関与すべきかを冷徹に分析して、その結果としての PKO 派遣なのか或いは他の手段での貢献なのかを選択すべきである。国際貢献という美名に酔い、或いは可哀想だからという単純な発想での人道的支援など迷惑千万だ。発展途上国に対する ODA もそうだが、なんでもかんでもやれば良いと言うものではない。

もっと、戦略的且つ冷徹な視点から分析して対応すべきである。日本の対外問題への対応を見て感ずるのはこのような戦略的思考の欠如である。

スーダン PKO 派遣問題を機にその様な観点での思考を身につけて欲しい。現状を見るに、少なくともそのような観点での議論が全くなされていない。寂しい限りだ。

国際問題に「人道」とか「可哀想」等とのセンチメンタリズムは無用である。時には有害ですらある。勿論、対外的には「人道」の仮面を付け、その様な装いをまとうことは重要なことではあるが、それが決定の最重要要因である筈はない。

(了)